

Title	前期河上肇における社会政策論とナショナリズム：もう一つの『貧乏物語』
Sub Title	The social policy and nationalism in case of Kawakami Hajime in his early period
Author	武藤, 秀太郎(Muto, Shutaro)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2006
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). No.23 (2006.) ,p.169- 201
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説#正誤訂正あり
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20060000-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前期河上肇における社会政策論とナシヨナリズム

——もう一つの『貧乏物語』——

武藤 秀太郎

はじめに

本稿の目的は、『貧乏物語』（一九一七）を公表するまでにいたる前期河上肇（一八七九—一九四六）の社会政策論を、おもに彼におけるナシヨナリズムの変遷との関わりから明らかにすることにある。⁽¹⁾

河上が東京帝国大学法科大学へ入学した翌月の一九八八年十月、第三回農商工高等会議で、農商務省が提示した工場法案が審議された。横山源之助が『日本之下層社会』（一九九九）で、日清戦争後を「労働問題の新紀元」と位置づけたように⁽²⁾、この明治三十年前後は、各地で同盟罷工が起き、鉄工や活版工の労働組合が結成されたり、鉱毒被害から足尾銅山の操業停止を求める一連のキャンペーンが展開されるなど、社会運動が本格化した時期であった。答申を得た工場法案は結局、議会へ上程されずに終わったが、当時同法の推進者であっ

た大蔵官僚添田寿一の言葉を借りれば、「国家ノ自衛ト云ヒマスルカ国家ハドウシテモ棄置カレヌト云フ弊害ヲ見ルニ至ツタ⁽³⁾」との認識が存在したのである。

こうした事態を受け、アカデミズムの側でも、金井延や桑田熊蔵、高野岩三郎ら、東京帝大関係者が中心となつて一八九六年、社会政策学会が組織された⁽⁴⁾。ドイツ社会政策学会 (Verein für Sozialpolitik) の日本版たらんと、同国営業条例 (Gewerbeordnung) の討究からはじまった当学会は、第三回高等会議の開会中、神田の青年会館で公開講演会をおこない、工場法制定の必要性を訴え、世論を喚起した。一九〇七年十二月に開催された第一回大会の討議題目にも、「工場法」が掲げられ、反対論者だった来賓の洪沢栄一から、「今日に於て工場法が尚ほ早い⁽⁵⁾か、或は最早宜いかと云ふ問題におきましては、私はもう今日は尚ほ早いとは申さぬで宜からうと思ふのであります」との発言を引き出すなど、工場法実現 (一九一一年公布、一六年施行) のための外堀を埋める役割を果たしたといえる。

学生時代、金井の講義を受け、社会政策学会の第二世代として活躍した河上は当初、佐藤信淵の『垂統秘録』と『宇内混同秘策』を、それぞれ社会政策と帝国主義の必要性について論じた「内和外張の政策」の先駆的著作であると称揚したいわゆる「社会帝国主義」者であつた⁽⁶⁾。実際、河上は足尾鉍毒地救済を求める演説を聴いた折、社会・国家のために貢献したいとの一心から衣類一切の寄付を⁽⁷⁾こころみた反面、イギリスのセシル・ローズのような植民者がいないのを悲しむと、郷里の新聞に寄稿していた⁽⁸⁾。同郷の吉田松陰を憂国の士と仰いだ最初期の河上にとって、窮民救済と対外的膨張は、何のわだかまりなく結びつけられていたわけである。

だが、その後マルクス主義者にいたるまでの河上の言動をみると、彼におけるナショナリズムが必ずしも安定的でなかったことが分かる。とくに大逆事件から一九一〇年代後半にわたり、河上の激情が「理性的判断の

埒外にふきだしていった」(鹿野政直)⁽⁹⁾、「エスノセントリックと評してよいようなナショナリズムの高揚を呼び起こした」(米原謙)⁽¹⁰⁾と形容されるような、大きな振幅をみせている。たとえば、約一年半のヨーロッパ留学から帰国した河上は一九一五年五月十六日、京都帝国大学の経済読書会で「人種問題」と題した報告をおこなった席上、こう発言していた。

混血問題ニツキテハ、家畜ノ場合ト国民ノ場合トヲ區別セザル可カラズ。善馬ト悪馬トヲ合スレバ中間ノ馬ヲ得ベケレドモ、吾人ハ往々ニシテ中間ノ馬ニテ満足ス。然レトモ日本人ト朝鮮人トヲ混血セシメ中間ノ人種ヲ得ルコトハ邦人ノ忍ブ能ハザル所也……⁽¹¹⁾(傍点筆者。以下の傍点も同じ)

日本人が世界の最「優等人種」となるためにも、純血を保たなければならない。この河上の主張は、人種思想の観点から朝鮮人との混血忌避を唱えた早期の例といわれている。⁽¹²⁾

かつて内田義彦は、河上の思想をマルクス主義者へ大成するプロセスとしてとらえるのではなく、新旧学説の接合を図りつつ、その時々々の時事問題へ愚直に取り組んだ点にこそ着目すべきと指摘した。⁽¹³⁾すなわち、河上が残した一見ナンセンスに思える言動の数々にも、当時日本が当面した課題に対する鋭い洞察を読みとることができるのである。右の人種発言なども、若き日の一時的な逸脱とみなすのでなく、河上の根底にあった問題意識と時代状況をつきあわせて考察する必要がある。

本稿では、以上の見地から、前期河上の思想を再検討してゆきたい。以下ではまず、処女作『経済学上之根本観念』(一九〇五)や『日本尊農論』(一九〇五)をたよりに、河上の国民経済観、および農業保全に基づい

た経済政策論を検討する。つづいて、京都帝国大学赴任後、講義を通じて具現化された彼の日本国家論をふまえた上で、舌禍を招いた沖繩講演の思想的背景を探ってゆく。さいごに、ヨーロッパ留学の見聞記『祖国を顧みて』（一九一五）から『貧乏物語』へと連なる、彼の国家構想を明らかにしたい。

一 国民経済と農業保全

東京帝国大学法科大学を卒業後、大学院に進学した河上は一九〇三年一月、指導教授であった松崎蔵之助の推挙により、東京帝大農科大学の講師に就任した。松崎はドイツ歴史学派、なかんずくワグナー（A.H.G.Wagner）から影響を受けた財政学者で、地租軽減や信用組合による自作農保全を唱えていた。また、対露強硬論を唱えた七博士には加わらなかったものの、その起点となった六博士による『諸大対外意見筆記』（一九〇〇）で、松崎は北進事変の善後策に、将来の領土拡張につながる中国保全の必要性を主張した。松崎について、河上は晩年、学問上の指導を受けなかったと否定的に回顧している⁽¹⁴⁾。だが、当時は農業が都会の繁栄を維持する原動力であるという「理」を説き、「農工商三者の併進鼎立」を唱えた⁽¹⁵⁾とされる松崎を、リスト（F.List）になぞらえ称揚するなど、その学問的影響は小さくなかったと思われる⁽¹⁶⁾。

実際、担当した農政学講義の成果といえる『日本尊農論』や『日本農政学』（一九〇六）では、「国家の興亡と健全なる国民経済の発達とは常に離るべからざる関係」にあるとされ、「健全なる国民経済の発達は農工商の三者をして能く其の鼎立の勢を保たしむる」⁽¹⁷⁾点に求められた。農政学は、この国民経済の一端を担う農業の実態や理想、政策の社会的効果について、批評的研究をなす学問とされる⁽¹⁸⁾。ちなみに、同じく松崎の下で学ん

だ柳田国男も、農政学を「一国ノ農業ヲシテ如何ナル程度ニ迄国家ノ進運ニ貢献セシムルコトヲ得ルカノ問題ヲ研究スルモノ」と、国家を本位に置いた学問としてとらえていた。⁽¹⁹⁾

国民経済という概念については、『日本尊農論』に先立ち刊行された『経済学上之根本観念』（一九〇五）、および『経済学原論』上巻（一九〇五）で、「何人の創意又は命令に本きて成立せるものに非らずして、只だ社会進歩の結果として自然に発生せし産物」と定義され、その計画は「数千年の歴史と永久の生命を有すべき国民の組成分子たる各経済単位及び各経済団体」により定まると説明された。⁽²⁰⁾ 当然、日本農政学も、日本の国民経済に即して講ぜられなければならないこととなる。この国民経済を歴史的・自然的集合体とみなす見解は、クラインヴェヒター（F.Kleinwächter）やワグナー、シュモラー（G.Schmoller）が再三引証されているように、ドイツ経済学から多くの示唆を得たものと考えられる。

河上が農政学に取り組んだきっかけは、講義を担当したという偶然が大きかったものの、大学院では日本経済思想史を専攻し、『徳川幕府ノ穀物政策』（一九〇四）などの論文を発表していた。ただ、河上は持論の農業保全を基礎とする農工商併立論を、近世の農本思想からはつきりと区別した。彼によれば、近世の農本思想は、鎖国下の国民経済を前提としたのに対し、当今は世界経済との関連から、農業保全を論じなければならないというのである。

その際、河上が陥ってならない前例として念頭に置いたのは、イギリスであった。⁽²¹⁾ イギリスはいち早く産業革命を遂げ、十九世紀前半を通じて「世界の工場」としての地位を謳歌した。だがその後、フランスやドイツ、アメリカをはじめとする各国の追い上げにあい、独占的な利益は失われてしまった。そればかりか、逆にイギリスの商工偏重主義は、農業を衰退させ、一大問題となっている。

ひるがえって、日本をみた場合、現在東洋唯一の工業国として利益を享受する一方、綿花や大豆などの農作物栽培は、壊滅の一途をたどった。今後、原料を仰いでいる中国が文明化を遂げれば、日本はひとたまりもないであろう。⁽²²⁾ 実際、東インドの状況をみれば、「支那人が如何に経済的技能に富んで居るか、如何に平和の戦争に於て勝利を得つつあるか」が明らかで、早晚日本も中国の経済力に飲み込まれる恐れがある。⁽²³⁾ このように河上は、マーチン (J.W.Martin) の『英国農業の退廃』 (*The Ruin of Rural England*) やクロポトキン (P.Kropotkin) の『田園・工場・仕事場』 (*Fields, Factories and Workshops*) などから得た知識をもとに、イギリスの経験を日本にオーバラップさせつつ、農業保全を唱えたのである。

世の中が弱肉強食の生存競争下に置かれているという認識はまた、河上が当初、社会主義に一定の理解を示しつつも、コミットできなかった大きな理由の一つであった。たとえば、自由競争の弊を説き、企業が公有化された理想社会を描いた矢野龍溪の『新社会』 (一九〇二) に対し、河上は競争が薄弱となれば、人心が遊惰へと傾くのではないかという懸念を表明した。優勝劣敗に伴う「積極的の奨励」と「消極的の刑罰」がなければ、社会はなかなか進歩発達を遂げがたい。こうした事態は、列強が対立する世にあつて「最も寒心に耐えざる所」と思われたのである。⁽²⁴⁾

農業保全の必要性は、単に経済的理由だけにとどまらない。農民は、徴兵検査の高い合格率から明らかなように「強兵」の源泉である。⁽²⁵⁾ また、田舎は人口増加率が高い反面、都会へと転出する割合が大きく、「強壮なる労働者」を供給する源泉ともなっている。このいわゆる「強兵」・「強壮なる労働者」農村起源論は、濃淡の差はあれ、河上をはじめ松崎や横井、新渡戸稲造、酒匂常明など、当時の農業経済研究者により、広く唱えられた説であった。⁽²⁶⁾

河上はさらに、農業を保全する「風俗上の理由」として、(一) 農業が国民を「質素」へと導くのに対し、商工業は「奢侈」へと誘うこと、(二) 農業者は一般に「篤実」の気風に富むのに反し、商工業者は常に「輕薄」であること、(三) 農業者は商工業者と比べ、愛国心に富むこと、(四) 農業者は「保守的」ながらも「溫順」であり、商工業者は「進歩的」だが「革命的」であること、の四点を挙げた。⁽²⁷⁾これらは、横井が「農業汎論」(一九〇二)で掲げた農民の特性とほぼ一致する。⁽²⁸⁾横井は、自らが主宰した虚遊軒文庫の第二編として刊行された『日本尊農論』に、「正確穩当、言々皆肯綮に中らざるはなし」と評した「序」を寄せたのに対し、⁽²⁹⁾河上も横井を、商工偏重の誤謬を喝破し、世人を警醒した「農学者中の一異彩」と称揚した。⁽³⁰⁾横井はまた、河上が設立した西ヶ原振農会の会長も務めており、両者は当時、思想的に共通する面が大きかったといえる。⁽³¹⁾

かつて内田義彦は、こうした道徳的規範を農業に求めるスタンスについて、「どうしようもなく古い」とした上で、河上の農業保全論における経済的理由と道徳的理由が、「完全に矛盾する」と指摘した。⁽³²⁾だが、河上自身の本意に即してみた場合、双方は必ずしも、別個に取り扱われていたわけではない。現に農業保全を怠ったイギリスは、経済的損失のみならず、多大な非経済的損害を被ったと考えられたのである。

英国が農業を犠牲としたるが、為めの損失は、吾輩の見る所に、百億圓に近き金銭上の損失は勿論、尚その外に社会上政治上道徳上に於ける損失少からずと考ふ。国民の健康は是が為めに害せられたらん。勇敢なる兵士は是が為めに跡を失ひたらん。村落に於ける良風美俗衰へて、輕薄虚偽の風俗一般の社会に侵染せん。愛国の精神、犠牲の精神次第に衰へて、個人中心の利己的思想漸く起らん。国の政治家は外交場裏に於いて最早や武力に訴ふるの覺悟を為し能はざらん。⁽³³⁾

「経済」と「道德」の調和をいかに図るかは、終生河上を貫いたテーマで、ときに足尾鉋毒地救済のために衣類一切の寄付を申し出たり、家庭や職をなげうち、伊藤証信の主宰する無我愛運動へ飛び込んだりと、事關打開のため突飛な実践が試みられた。農業保全論は、このジレンマを解決する策の一環として打ち出されたのである。

ところで、「経済」と「道德」の調和は日露戦争後、政府レベルでも強く意識された課題であった。一九〇五年十一月、二宮尊徳没後五十年記念事業が催されたのを契機に、各地に報徳会が創設された。この政府版報徳社ともいふべき報徳会が、設立目的として掲げたスローガンこそ、他ならぬ「国民の道義的及経済的二要素の作興、並に其調和」であつた。⁽³⁴⁾

また、〇八年十月に發布された戊申詔書では、「日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ恵沢ヲ共ニセントスル固ヨリ内国運ノ發展ニ須ツ」とする一方、「宜ク上下心ヲ一ニシ忠実業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ実ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ」ことがうたわれた。⁽³⁵⁾この詔書に込められた意味内容は、当時内務次官であつた一木喜徳郎が「今日の経済状態と道德状態と相適合して居る所の道德標準」と説き、⁽³⁶⁾また井上哲治郎が「経済と道德と云ふ二つのものが、相須たなければならぬと云ふ意味が、尽されてある」と解釈したように、⁽³⁷⁾報徳会イデオロギーを敷衍したものであつた。これを受け〇九年七月、内務省により第一回地方改良事業講習会が開催され、以後部落有財産の統一や神社整理など、いわゆる地方改良運動が押し進められていったのである。

「経済」と「道德」の調和が声高に叫ばれたことは、逆に両者がバランスを失っているという危機意識の裏返しにはかならない。戊申詔書が出される直前、河上は農民人口の相対的減少がもたらす弊害を指摘しつつ、

こう述べていた。

嗚呼、国情は將に一変せんとす。由来吾が国の歴史に於いて最も異彩を放ちし武士道と忠君愛国の思想と国家主義と家族主義とは、今や経済事情の変遷之が主因となりて、正に激変を蒙りつつあり。夫れ歴史を忘るること最も甚しき吾が国民にして、今ま此の如き激変の事情に包容せらる。一步を誤らば、是れ或は陷虎の危機に非らざるか。嗚呼日本人は遂に化して米国人とならざるを得べきか。⁽³⁸⁾

経済発展を基礎とする社会変動が、既存の道德的規範を切り崩してゆく。「国情將に一変せん」との認識が当時、官民を問わず広く共有されていたのである。

二 「日本独特の国家主義」と沖繩

一九〇八年八月、河上は戸田海市の勧誘を受け、講師として京都帝国大学法科大学へ赴任した。河上の回想によれば、当初農政学の講義を担当する予定だったものの、前任助教の異議により、経済史学を受け持つこととなったという。⁽³⁹⁾ 経済史については、何の腹案もなかったと述べているが、上巻のみ公刊された『経済学原論』の構想段階では、中巻の第二編に「経済史論」が予定されており、けっして無関心でなかったことが確認できる。

経済史研究における河上の主眼は、経済の本質を見極める点にあったといえる。実際、初年度講義の成果というべき『人類原始ノ生活』(一九〇九)では、その歴史的探究が、はるか人類の起源にまでさかのぼられた。⁽⁴⁰⁾

最古の人類と動物を分かったものは何なのか。そこで、河上が人間固有の経済的特質と認めたのが、生産面における道具の製造と、消費面での火の使用であった。

同書ではまた、人類が家族以外の社会集団を組織していなかったとされる状態から、国家生成へと至るプロセスが検討された。河上は、狩猟採取から植物栽培へと移行する段階で起こる土着化を、人類史上の一大画期とみなした一方、その後家族以上の団体組織が形成されるまでに、相当の年月が費やされたと推理した。そして、ひとたび祖先崇拜の思想が発生すると、数百数千の家族が共同の思想・目的の下に集い、血族的団体を組成し、国家の原型が形作られたとしている。

のちに、河上はこうした見地から、日本国家統一の淵源を、崇神天皇の代におこなわれたとされる神宮と皇居の分離にみいだした。⁽⁴¹⁾ 彼によれば、このことは通常いわれるような祭政分離でなく、逆に従来天皇の氏神に過ぎなかった神霊が、種族共同の神となった祭政一致を意味するという。すなわち、皇居からの神宮独立は、天皇氏の内部に止まっていた天照大神が、大和民族共同の祖先として崇拜されるようになった「宗教上の統一融合（即ち人心の統一融合）」のメルクマールだということである。

建国の精神が、このように血縁的であると同時に、宗教的性質を帯びているのは、古代ギリシャやローマなど、世界共通でみられる普遍的現象にはかならない。以後、万物の進化に伴う分化作用で、血縁的・宗教的關係は希薄化し、代わりに国家統合の原理として経済的要素が支配的となつてゆく。だが、日本だけは例外で、依然として当初の精神を保持し続けているのは、万国に比類なしと称せられる所以であるとされる。

経済史研究の対象領域は、その後さらに産業革命期まで拡大され、一九一〇年度の講義では「漁狩時代」、「牧畜時代」、「農耕時代」を一括して「道具時代」と呼び、それ以降を「機械時代」とする時代区分が提起さ

(42) ということである。ここでいう機械とは、「複雑ナル道具ニシテ自動的作用ヲ含有スルモノ」と定義されている。また、河上は人類社会進化の根本基礎を、経済の発展に置き、その限りでマルクスの唯物史観を是認した。唯物史観については、河上が〇五年六月に翻訳刊行したセーリグマン (E. R. A. Seligman) の『歴史之経済的説明 新史観』(The Economic Interpretation of History) が、日本ではじめての解説書といわれている。(43) ただ、河上は当時、「階級ナルモノハ全ク存在セザリシ時代モアリ、又将来ニ於テモ斯カル社会ナシトモ限ラズ」との理由から、マルクスの階級闘争史観に異議を唱えていた。なお、当年の講義ノートは、機械の応用・展開が総じて労働者の利益増進に貢献したものの、労働を節約した効果が還元されたかどうかは大いに疑わしいという一文で結ばれている。

さて、以上のように、河上が人類や国家の歴史的推移について、思索をめぐらしていた最中、世間では一九一〇年五月から六月にわたり、幸徳秋水ら社会主義者二〇余名が大逆罪嫌疑で検挙された。この大逆事件は戊申詔書公布直前の赤旗事件(一九〇八年六月)に続く、社会主義思想の取締りを強化した政府の総決算ともいふべき出来事であった。河上は、この事件の大審院公判期間(一九一〇年十二月十一—二十九日)とほぼ並行する形で、『時勢之変』(一九一一)と題した著作を一気呵成に書き上げている。

書中論ずる所、読者の意に戻るもの多からん。殊に言論の抑圧に關し当局の政策に口実分疏を附するが如きは、最も同職の批難を蒙る点ならんも、吾人は目下の国情に鑑み、敢て之を以て必要已むを得ざるの「想税」ならん歟と信ぜんとするに至りたるもの也。故に大に論ずべき当今の問題にして、特に余の避けて之を顧みざりしも亦た問々あり。夫れ今の時代の学者は、日進の智識に一步も後るる勿れと要求せ

らるゝと同時に、伝来の感情は又た一毫も之を曲ぐる勿れと要求せらるゝ痛切なる矛盾の下に、纔に其の生を保てる者なり。而して吾人は、此の強国に生れたることを無上の幸福と為すものなるが故に、悦んで此の矛盾を甘受し進んで彼の想税を負担せんとする者なり。⁽⁴⁵⁾

序言で、こう断り書きされた『時勢之変』ではまず、今日の未曾有といえる社会進歩の根本原因が、産業革命を起点とする機械の發明・發達に求められ、日本が清国やロシアと戦い台湾・南樺太を領有し、今また朝鮮を併合するなど、東洋の覇権を握れたのも、機械の効果によるところが少なくないと指摘された。他方、機械の發展は農業を転覆させ、国民の肉体的弱体化や忍耐・服従性の衰退をもたらすなど、大きな社会的動揺を引き起こした。この機械がおよぼした正負の影響に関する分析は、それぞれ経済史と農政学講義の成果をもとに展開されており、両研究における河上の問題意識が、社会変動の本質を見極める点で一貫していたことが確認できる。

こうした社会経済上のダブル・バインドは、ひいては国家の存立根拠にまで深い亀裂を生じさせている。すなわち、物質上における国際競争に遅れまいとすれば、科学の研究と普及を一日もおろそかにできない反面、その科学の所産である知識と理性が、国家を成り立たせる祖先伝来の感情と信仰を破壊しようとする場合、「科学の反逆」として禁圧しなければならない。これはあたかも「魚を池に放つて游がざらしめんとする」ような所為である。さらに河上は、対外的膨張が「国家的道德」に与える影響について、こう懸念を表明していた。

物界の進歩極めて緩慢にして社会の事相略ぼ平静の状態に在る時は、祖先伝来の信仰習慣が一般社会の道德の標準となり、各個人は之に依つて其の行為の善惡を判定し得べけれども、今の時代の如く物界の發展急激にして、事々物々殆ど前代の面目を改めざるなきの時節に當つては、前代の習慣道德の中そのまゝの形に於いては新時代の事情に適合せざるもの漸く多く、少くとも前代の習慣道德が予想せざりし新たな事件、新たな場合統発するを以て、(日本の今日にも斯かる事例多し、殊に新領土の合併は国家的道德の上に影響すること少からざるものならん)、一方には旧時代の伝説信仰次第に其の權威を喪ふと同時に、他方には新たな道德の標準未だ樹立さるるに至らず……⁽⁴⁶⁾

ここである「新領土の合併」とはもちろん、一九一〇年八月に締結された韓国併合に関する日韓条約を念頭に置いていよう。ただし、『時勢之變』の結論部では、こうした指摘とは裏腹に、ヨーロッパ人のように、日本も世界を跋扈し、良地を選んで国民の食料を生産する道を講ずべきと、「帝國主義的農業論者」になることが宣言されていた。

植民地領有に関連して、河上は洋行中の井上密に代わって担当した一九一〇年度の政治学講義の中で、国家形態を人種、宗教、経済的關係に基づき「自然ニ発達シタ所ノ一ノ有機体」である「普通ノ国家」と、「人為ニ依ツテ製造サレタル一ノ無機体」たる「征服ニ本ク国家」の二種類に大別していた。⁽⁴⁷⁾この分類にしたがえば、日本は元来、自然的発達に基づく「普通ノ国家」で、血族的・宗教的な分子がなお多く残っているが、台湾を領有し、朝鮮を保護国とした結果、「征服ニ本ク国家」の性質も合わせ持つようになったこととなる。こうした征服の有無による有機的・無機的國家という類別は、講義ノートで参考文献に挙げられたシーリー

(J.R.Seely) の『政治学入門』(Introduction to Political Science) から大きな示唆を得たと考えられる。⁽⁴⁸⁾

『時勢之変』の執筆から出版に至る間に発表された「日本独特の国家主義」(一九一一)は、この特殊性を帯びた自然的産物とされる日本国家の実態解明が試みられた論文であった。河上はまず、「国体」が政治の目的により定まるとした上で、西洋諸国が個人を目的に置き、国家をその手段とする「民主国」であるのに対し、日本が逆に国家を目的に、個人を手段とする「国主国」であると規定した。⁽⁴⁹⁾つまり、「民主国」の建国の精神は、「天賦人權」・「人賦國權」に基づく個人主義で、「国主国」のそれは、「天賦國權」・「國賦人權」の国家主義だというわけである。こうした「国体」の差異は、民族の信仰より生じるが、日本が「独特」とされる所以は、祖先崇拜の宗教が次第に発展し、今日のような「国家崇拜教」となった点にある。河上はこの国家主義が、貧小国を以て強国たらしめた「日本国の精華」であるとする一方、国家主義に無用有害な媚を呈する一切の言行に反対するとし、また「日本国は如何にも強けれど、日本人は確に弱し。西洋の個人主義を甘く同化して(必ずしも之を敵視するの要なからん)、日本人をして鬼に金棒たらしめん」と希望していた。

これら韓国併合や大逆事件を背景に執筆された一連の論考からうかがえるように、河上は当時、日本の国家主義的、帝国主義的側面に対し、非常にアンビヴァレントな態度をとっていた。もちろん、『時勢之変』の序言で述べられたように、論すべき問題の核心に触れられない事情も斟酌しなければならない。もとより、日本の国家主義が「独特」な自然的産物で、「征服ニ本ク国家」への移行により変動をこうむりつつあるとの見解は、専ら思索の所産であり、実見に基づく他国との対比から導き出されたわけでない。その意味で、一九一一年四月一日より八日にわたり滞在した沖縄での体験は、偶然にも現実から思想を照射することとなった出来事であった。

河上によれば、大学の命令により沖縄へ出張した元来の目的は、地割という「共產主義的」な制度の研究にあったものの、はからずもその正反対といふべき性質を有する糸満の「個人主義的」家族を観察したという。実際、滞在中に書き留められたノートには、沖縄における個人主義的性格の強さに反比例して、国家意識が希薄であることを指摘した、以下のような一節がある。

△国家ハ弱イモノダト云フ思想。

此ノ思想ハ恐ク牢乎トシテ拔ケザラン。然ルニ日本ノ国家主義ハ国家ニ最上ノ価値ヲ認め、国家ヲ永遠ノモノトシ、個人ハ只ダ国家ノ為メニ働ケト云フ主義也。

此ノ主義ヲ強制的ニツギ込ムコトノ可能如何。不可能ノコトヲ強イテ行フノ利害如何。

△日本ノ国家主義ニ対スル余ノ見解ハ的中セリ……⁽⁵⁰⁾

ノートではさらに、高等小学修身書にある「国家ハ永遠ニ亘リテ独立ニ生存ス。個人ノ生存ハ一時ノモノニシテ国家ノ生存ニ比スレハ極メテ短ク、寧ろ其ノ一部ヲナスモノト謂フベシ」という文句が俎上にのせられ、国家が永遠どころか、むしろ人類史的一幕に過ぎないこと、またこうした考えが日本国家のみを永遠とし、他の人類を併呑する根拠となっているが、「新植民地ノ人ノ信仰トナリ得ルヤ否ヤ」と疑義が付されていた。

これを確認するかのように、河上は神武天皇祭にあたる四月三日、県庁の依頼でおこなわれた「新時代来る」と題した演説の中で、沖縄が言語、風俗習慣、思想など、あらゆる面で内地とその歴史を異にし、「忠君愛国の思想」に乏しいことを主張した。⁽⁵¹⁾ もっとも、「忠君愛国の思想」は日本特有の美点であるが、これが薄弱だ

からといって、少しも憂慮するにあたらな。なぜなら、キリストや釈迦など、過去の歴史をみても偉人の多くは国家的結合の弱いところから生まれたケースが多く、それゆえ沖縄県人の中から他日、新時代を支配する偉人豪傑が出てくるのが、大いに期待できるというのである。

この演説に対し、当時まさに「忠君愛国の思想」の鼓吹に努めていた沖縄の言論界より大きな反発が起こった。河上は、四月八日に再度開かれた「矛盾と調和」という講演で、大矛盾の中にこそ大調和があるとの見地から、日本国家を真に強くするために、通常抑制の対象とされる「個人」を、逆に発達させなければならないと弁明し、二週間の滞在予定を繰り上げ帰途についた。いわゆる河上舌禍事件である。⁽⁵³⁾

なお、河上によれば、彼へ糸満の家族を紹介したのは、当時沖縄県立図書館の嘱託館長だった伊波普猷で、滞在中は毎日顔を合わせ、話を交わしたという。その際、『古琉球』（一九一一）の草稿をみせてもらった河上は、公刊にあたって跋文を寄せている。⁽⁵⁵⁾ また伊波は、先に言及した河上の崇神天皇論に我が意を得、『古琉球の政治』（一九二二）で尚真王による琉球統一の説明に援用していた。⁽⁵⁶⁾ 『古琉球の政治』の巻頭には、「この小冊子をわが尊敬する河上博士にささぐ」とあり、河上との親近性がうかがえるが、他方で伊波は、人種の見地から日琉同祖を唱えていた。同じく日琉同祖論者で、『古琉球の政治』出版に力添えした柳田も、のちに『古琉球』の跋にふれ、「琉球の人自身は、あくまでわれわれ日本人の一部であると主張していたし、事実またそのわけであるから、河上君の話はどうも沖縄人固有の気持に水をさすような結果になった」と述べている。⁽⁵⁷⁾

不慮の事態により短期間に終わったが、河上にとって沖縄旅行は、日本の国家イデオロギーを相対的に把握する視座が得られた貴重な経験だったといえる。とくに、ここで着目したのは沖縄調査以降、河上の議論に植民地獲得をうながす論調がみられなくなる点である。これを機に、河上は本土に限定した非膨張的な形で、

社会問題解決を模索するようになるのである。

三 純血主義と「夢の国」

一九一三年十月二五日、文部省より留学の辞令を受けた河上は、神戸港発の加茂丸に乗り、ヨーロッパへ向け出発した。彼が親類らに宛てた手紙によれば途中、上海、コロンボ、スエズ運河、マルセーユ、ロンドンなどを経由した後、十二月二十六日にブリュッセルに到着したという。当地でフランス語の学習を開始した河上は、翌年二月十日にパリへ移転している。

河上は両地滞在中に執筆したエッセイで、「非分析的」で、すべてをひとまとめにする日本文明に対し、西欧文明が「分析的」で、各単位にはつきりと区分すると主張した。⁽⁵⁸⁾衣食住はもちろん、庭園などをみても、自然風景の直接的な縮図化を図る日本と対照的に、西洋では全構成要素がいったん最小単位に還元された後、シンメトリに総合化されている。河上によれば、こうした異同は、まさに西欧の個人主義／世界主義と、日本の家族主義／国家主義の差異を表現するものであった。

実際、西洋では、夫婦間さえ権利義務関係が明確化されており、あらゆる社会関係の中間に、帰属のはつきりしないグレーゾーンがある日本と大きく異なっている。河上はこの日本の社会構造が、レンガを積んだような機械的な西洋社会と違い、何ともいえない面白味があると評価する一方、各個人が互いに遠慮し、ともすれば有為の者が、無為の家族・親族のために犠牲となるケースが多く、個人として伸びがたい弊があると指摘した。西洋で科学的知識が発達したのも、こうした分析的思考より生じた創造力の結果であり、決して日本が劣っ

ていたわけではない。ただ、日本文明は西洋文明よりも理解・模倣しがたいため、東西文明を真に調和させる天分を有するのは、日本人以外にないというのである。

河上はパリで、いわゆる新生事件の渦中にあった島崎藤村が下宿していた向かいのホテルに居を構え、昼夜食卓を共にしたという。のちに、藤村が発表した紀行文『エトランゼ』（一九二二）では、当時の河上が「日本には日本固有のですね、全く欧羅巴と異つた、優秀な文明があると考へなければ、私共の立場はなくなります」と主張したり、「愛国心といふものを忘れないで居て下さい」と藤村をたしなめるなど、熱烈なナショナリストとして描写されている。⁽⁵⁹⁾ たしかに、河上のヨーロッパ見聞記『祖国を顧みて』冒頭には、「へめぐりてあまたの国のさまを見て 住むべき国は日本とぞ思ふ」という一首が掲げられ、留学を通じて愛国心が喚起されたことがうかがえる。だが、価値判断のブレを別にして、日本の国家主義的特質をみきわめるという河上の問題関心自体は、留学前から一貫していたといえる。

パリに二ヶ月余り滞在した河上は、その後ドイツに向かい、四月二十三日にベルリンへ到着した。ベルリンでも、加算と減算という計算法の相違に着目しつつ、「吾々は驚くべき発達を遂げたる日本式の文明を有つてゐる事を忘れてはならぬ」と主張した論文を執筆したり、語学教師から「河上は日本の外に国は無いと思つてゐる」と指摘されるなど、愛国心を高揚させていた。⁽⁶⁰⁾ そんな中、サラエヴォ事件をきっかけに、オーストリアが七月二十八日、セルビアへ砲撃を開始し、第一次世界大戦が勃発、同盟国ドイツでも八月一日、ロシアへの宣戦に伴い総動員令が發布され、戦時体制へと突入していった。

当初、河上はドイツ全土でおこなわれつつある戦時経済を見守ろうと、ベルリンに居残る決心を固めていた。だが、八月二十三日に現実となった日独開戦の危機から、大使館より国外退去勧告が下ったため、八月十五日

の夜にベルリンを脱出し、ハーグを経て海路、イギリスへと避難した。ひとまずロンドンに下宿先を定めた河上は、総動員令後のドイツについて、次のような所感を『大阪朝日新聞』に書き送っている。

今度の戦争では独逸は最初から全力を挙げて掛かった。動員令が下ると同時に、私共と同じ建物に住んで居た十七歳以上の若者はまだ一度も軍隊の訓練を受けて居らぬのに早速召集されて仕舞った。大学其他の学校も直ちに閉鎖されて仕舞った。続いて財政金融上に於ては以上述べたる如き非常手段が直に採用された。之に比べると日露戦争当時の我国はまだ全力の半ばも出しては居なかつた。兌換も停止せず、学校も休まず、国民軍も出さず、大体に於いて平時の機関は其のままに運転して居たのであるが、今度の独逸の勢ひは其と全く相違して居る。殆ど国民全体を挙げて喰はず飲まず眠らずに戦争して居る姿である。⁽⁶¹⁾

これと対照的に、ロンドンでは八月四日に英独交戦状態に入つたものの、⁽⁶²⁾昨年末に寄港した際の状況とほとんど変わらず、これが交戦国の首都かと怪しむほど、平静を保っていたという。軍隊にしても、徴兵制の布かれていないイギリスでは目下、志願兵を募っている有様で、盗人をみて縄をなう悠長さである。河上はこうしたイギリスの自由な氣風を高く評価する一方、今回の戦争が、勝敗はどうであれ、少なからざる教訓をイギリスに与えるだろうと示唆していた。

小さなスツケース以外、すべての荷物をベルリンに置き残してきた河上は、ロンドンに二ヶ月半ほど身を置いた後、ラムジー郊外のロッカレーへと移住した。このイギリスの片田舎で河上の関心を引いたのは、地主による土地利用の予想を超える粗放さと、それに付随する貧富の格差であつた。⁽⁶³⁾農村に居を構えてから一ヶ月

足らずした十二月四日、大使館より留学期間満了前の帰国許可を受けた河上は、即刻帰航手続きをとり、行きと同ルートを通つて一五年二月二六日、神戸へと帰港した。

「留学中ノ見聞ニ依テ、以前ニハ歴史ノ解釈上無視シテ可ナリト考ヘタ人種問題ヲ考ヘサセラルルニ至ツタ」⁽⁶⁴⁾。――帰朝後、河上が国家・国民を語る際、よく引き合いに出したのが、イギリスで購入したチェンバレン(H.S.Chamberlain)の『十九世紀の基礎』(Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts)であつた。⁽⁶⁵⁾河上は、チェンバレンが優等人種成立の条件として挙げた(一)卓越した素質の存在、(二)同種族交配、(三)優良種の人為選択、(四)若干の異種交配、(五)異種の適切な選択、および交配期間の厳密な限定に依拠しつつ、今日の日本人が「独特の強固なる国民性と国家」を持つに至つた所以を説明した。⁽⁶⁷⁾いわく、日本人は、神代の昔に「血液の大混合」をおこない、崇神天皇の時に国家統一を成し遂げ、それ以後一度も、異国人の侵入や征服を受けることなく、二〇〇年以上の長きにわたり、「血液の純血」を維持してきたというのである。

国が盛んになると、次第に領土を拡張し、他の民族を征服してゆき、いつの間にか「優等民族たる征服者」は、「劣等民族たる被征服者」と血を混ぜ合わせてしまいがちであるが、これは最も警戒しなければならない。⁽⁶⁸⁾というのも、混血がみだりに進行すれば、逆に感情や思想の国民的統一は、容易に奪われてしまうからである。「はじめに」で引用した朝鮮人との混血忌避も、こうした文脈から発せられたものであつた。河上は「一国民の血が、その歴史を決定する」(The blood of a nation determines its history)と同時に、「一国民の歴史が、その血を決定する」(The history of a nation determines its blood)というアメリカの魚類学者、ジョーダン(D.S.Jordan)の『国民の血』(The Blood of the Nation)における一節をしばしば引用したが、彼自身も「人種ト称スルモノハ之レヲ国民ト同一物ニ解セラレタシ」と、人種と国民を同一平面上に置いて理解していた。⁽⁷⁰⁾

河上はまた、第一次大戦によるヨーロッパ人の「血液的損害」を殊の外、深刻に受けとめていた。⁽⁷¹⁾ 戦争のために「強い種」が犠牲になったことで、西欧は再び元のような強い国家を形成することは、永遠にできないかもしれない。他方、日本が対華二ヶ条問題で血を流さずに落着できたのは、国家のため大いに慶賀すべきである。河上は帰国後はじめての翻訳として、フィッシャー (Irving Fisher)・フィスク (E.L.Fisk) の『如何に生活すべき乎』(How to live) をてがけている。交換方程式の定式化など、二〇世紀アメリカを代表する経済学者だったフィッシャーは、自身が結核を患い、療養した経験から、公衆衛生運動へも積極的にとりくんでいた。⁽⁷²⁾ 当時、物価問題に関心を持っていた河上は、フィッシャーの『利子率』(The rate of interest) と『資本と所得の性質』(The nature of capital and income) を解説・抄訳した『資本及利子歩合』(一九二二)を公刊しており、その縁で翻訳を依頼されたのである。『如何に生活すべき乎』は、タイトル通り衣服住に関する心得書だが、最終節「人種改良学」(Eugenics) では、肉体的・精神的障害者の結婚制限が説かれていた。このアメリカ優生協会のリーダーだったフィッシャーと、どれだけ関わりがあったかは明らかでないが、河上も将来計画的な人為淘汰で、「選ばれたる品質の人間のみが、此世に残存するに至る時代」が到来すれば、武者小路実篤が構想した「新しき村」のような共産社会の可能性も開けてくると展望していた。⁽⁷³⁾

「劣等民族」との混血忌避や、「種」の人為的選別。こうした一種エスノセントリックな議論に対しては、これまで「人道主義者」河上というイメージとのギャップから、ある種の戸惑いが表明されてきた。⁽⁷⁴⁾ だが、人心をいかに改良するかという彼の問題意識と、沖縄調査で感得した同化政策に対する懷疑をふまえた場合、この時期の人種論は、これら思想的延長上で打ち出されたと解釈することができる。

人種のほかに、河上が留学を機に強い関心を抱いたのは、イギリスにおける貧富の存在とドイツの戦時経済

体制であつた。「世界最富国」であるイギリスにも、健康さえ維持できない貧乏人が、数多く存在する一方、今日ドイツが八方から敵の攻撃を受けても、容易に屈しないのは、「驚くべき組織の力に依り、開戦以来、上下挙つて一切の奢侈贅沢を中止した」ためである。⁽⁷⁵⁾一九一六年九月から十二月にわたり、『大阪朝日新聞』に連載された『貧乏物語』は、この英独の觀察をもとに執筆された論説であつた。

『貧乏物語』の構成は大きく三つに分かれ、上編においてイギリスをはじめとする当時の「文明国」に、多数の「貧乏人」が存在することが指摘された後、中編でその原因が、「生活必需品」に向けられるべき生産力を、富者の需要する「奢侈品」へと振り分けてしまふ現今の経済組織に求められた。この現状分析に基づき、河上は下編で、貧乏根絶の方策として、(一) 富者による自発的な奢侈ぜいたくの廃止、(二) 所得再分配による貧富格差の解消、(三) 生産事業の国営化、の三つを提示した上で、(三) が現に戦時下のドイツで実施されている有様を、こう説明した。

皆が一生懸命になつて、一国の生産力を出来るだけ有効に使用しやうと真面目に考へて来れば、従来の経済組織は自から改造されて来ねばならぬ。大戦勃発後八方に敵を受けた独逸が、開戦後間もなく率先して経済組織の大改造を企てたのも、畢竟は之が為である。従来多数の人々が見て以て机上の空論と為し単に思索家の脳裡に描きし夢想郷に過ぎずと為せし所のものを彼は忽ちにして実現し來つたのである。思ふに開戦当時は、半年も経たぬ中に必ず経済的破産に陥るべしと予期された独逸が、今に至るも猶容易に屈せざるは、主として此の新組織の力に俟つ。真に我国家の前途を憂ふる者は、戦時に於ける独逸這個の経営に就いて大に学べし。若し夫れ其の新組織を名けて、或は社会主義なりとなし、或は国家主義なりと為

すが如きは、畢竟名の争ひのみ。名の異なるを以て其实を怪しむが如きは、恐らく識者の為すべき事ではなからう。⁽⁷⁶⁾

だが、河上はこうした経済組織の改革以上に、それを運用する人間の精神如何に重きを置いていた。社会組織の善悪は、寿司の押し方に巧拙があるようなものだが、いくら上手であっても、材料が良くなってはおいしい寿司はできない。すなわち、「押し方の工夫も無論肝要だが、其れと同時に之が材料に注意して、米だの肴だの椎茸だの玉子焼だの酢や砂糖などを其れぞれ精選しなければ為らぬ」というわけである。⁽⁷⁷⁾結局、『貧乏物語』では、制度の力に訴えるよりも、まず個人の自制に託するとの見地から、(一)が根本的解決策として掲げられた。

ところで、河上は『貧乏物語』連載前の一九一五年十二月、門下生であつた櫛田民蔵に次のような手紙を書き送っていた。

小生此頃貧民の事ばかり考へ居候。勉強もせうと思ひますが、追々社会主義の伝道にも力を分つ積りです。その中「現の世より夢の国へ」と題し、社会主義論、大阪朝日に連載可致と存居候。⁽⁷⁸⁾

実際、「現の世より夢の国へ」という論説は公表されなかったものの、同タイトルの付されたメモ書きが現存している。表紙に「棄稿」と記されたこのメモでは、時々覚めていながら見るという「夢の国」に触れる前に、「現の世」が『貧乏』上・中編の要約というべき形で総括された。だが、『貧乏物語』下編にあたる貧乏根

治策については、奢侈品需要の抑制でなく、(二)に相当する国家改造案が、以下のように「夢の国」として語られていた。

ソコデ最後ニ話ヲ夢ノ国ニ引キ入レテ、然ラバドウシタラ善イカト云フニ、私ハ此ノ天下ノ生産力ヲ支配スル全権ヲバ凡テ 天皇陛下ニ帰シ奉ルコトニシタイト思フ。恰モ維新ノ際諸侯ガ封土ヲ皇室ニ奉還シタヤウニ、今日ノ經濟界ニ於ケル諸侯ガ其事業ヲ国家ニ奉還シテ、世俗ニ謂フ三菱王国ノ主人モ、三井王国ノ主人モ、其他一切ノ事業家資本家ガ各々国家直属ノ官吏トナリ、カクテ吾々六千万ノ同胞ハ億兆心ヲ一ニシテ働ク、各々全力ヲ挙ゲテ国家社会ノ為ニ働ク、其代リ其レ其レ、天分ニ応ジ必要ニ応ジテ国家ヨリ給与ヲウケテ、何人モ貧困線以上ノ生活程度ヲ維持スルト云フ、サウ云フ世ノ中ニシタイモノト私ハ切望シテ居リマス。今日独逸ガ四方ニ敵ヲ受ケテ未ダ敢テ屈セザル所以ハ、戦時ニナツテカラ正ニ私ノ理想トスル所ヲ或程度マデ実行シツツアルガ為メデアル。私ハ我国ガ平時ニアツテ此理想ヲ実行スルコト一日早ケレバ一日ダケノ利益ガアル、一日後ケレバ一日ダケノ損ガアルト確信シテ居ル。此理想ヲ実行スルノ外ニハ、此貧乏国ヲ救フテ欧米諸国ヲ凌グニ至ルノ策ハナイト確信シテ居ル者デアリマス。⁽⁷⁹⁾

小林輝次が樺田から聞いた話によれば、『貧乏物語』が『大阪朝日新聞』に掲載される過程で、編集長であった長谷川如是閑の「朱筆で真赤になった原稿」が、何度も河上との間を往復したという。⁽⁸⁰⁾ いかなる修正がなされたのか、もとより伝聞で事の真偽も定かでないが、少なくとも河上は『貧乏物語』構想の段階で、ドイツの戦時状況と重ね合わせつつ、天皇を担いだ国家社会主義革命を、「現実社会ト完全ナル連絡ガアル」夢として

抱いていたのである。

おわりに

「大正五年の秋から冬にかけて、私が『朝日』にかの物語を連載してゐた頃は、思想界の様子が今とは余程違つてゐた。……実は其翌年に露西亜であのやうな大革命が起らうとは、私の全く予期しなかつた所である」⁽⁸¹⁾。

——実際に収録されなかつたものの、河上は『改版社会問題管見』（一九二〇）のために用意した序文で、こう述べていた。「かの物語」とは、もちろん『貧乏物語』を指している。たしかにロシア革命は、『自叙伝』でも回顧しているように、河上がマルクス主義へ傾倒してゆく一つのターニング・ポイントであつた。一九一九年一月に創刊された河上の個人雑誌『社会問題研究』でも、『賃労働と資本』（*Lohnarbeit und Kapital*）などの翻訳を含め、マルクス関連の記事が当初より多数掲載されている。

ただ、河上はマルクス主義に立脚した後も、「曾て日本国を忘れたり日本人を嫌つたりしたことはない」と言明した⁽⁸³⁾。また、第二次世界大戦終了直後の一九四五年九月一日、彼は戦後の日本が目指すべき進路を、こう提言していた。

大国衆民、富国強兵を目標に、軍国主義、侵略主義一点張で進んで来た我が日本は、大搏打の戦争を始めて一敗地にまみれ、明九月二日には米国、英国、ソヴェット連邦、中華民国等々の連合国に対し無条件降服の条約を結ぼうとしてゐる。誰も彼も口惜しい、くやしい、残念だと云つて、悲んだり憤つたりして

ゐる最中であり、愈々降伏の具体的諸条件が次ぎ次ぎに分かつて来るやうになれば、その悲憤は更に一段と加はることだらうと思ふが、私はしかし、日本人が之を機会に、老子の謂はゆる小国寡民の意義の極めて深きを悟るに至れば、今後の日本人は従前に比べ却て仕合せになりはしないかと思つてゐる。⁽⁸⁴⁾

この「小国寡民、其の食を甘しとし、其の服を美しとし、其の居に甘んじ、其の俗を楽しむ。隣国相望みて、雞犬の声相聞ゆるも、民、老死に至るまで相往来せず」という老子の言葉に託された理念は、「大國衆民」的な主張を唱えていた初期の頃から、河上の根底に流れ続けていたといえる。⁽⁸⁵⁾

「社会帝国主義」的主張から『貧乏物語』に至る河上の思想変遷は、この理念と現実とのギャップをなんとか埋め合わせようと、試行錯誤した軌跡にはかならなかつた。機械導入による経済的發展が、列強対立の世を生き抜く必須条件である一方、それに伴う貧富の格差や利己主義の助長は、旧来の国家的紐帯を内側から掘り崩してゆくと感知された。また、小国をして一等国ならしめたとされる「日本独特の国家主義」は、他方で「個人」を大きく抑圧した。こうした二項対立的な状況にあつて、河上が当初、処方箋として提示したのが農業保全論であつた。

その後、大逆事件、および沖繩調査を通じ、植民地領有が内外に及ぼす社会的影響に疑念を持った河上は、いわば内に閉じた形で思索をめぐらすようになる。ヨーロッパ留学で抱くようになった人種やドイツ戦時体制に対する関心は、排外的側面がみられる反面、非膨張的性格を有した微妙なものであつた。このことは「夢の国」として語られた国家革命構想にもあてはまる。

大正デモクラシー期の代表作である『貧乏物語』は、表向きの樂觀的な結論と裏腹に、社会問題解決とナシヨ

ナリズムの調和を図ろうと、前期河上が苦悩した末の産物だったのである。

注

(1) 杉原四郎は、河上の生涯をマルクス主義者以前と以後に大きく二分した上で、前期の思想を『貧乏物語』に代表させている(杉原四郎『日本の経済思想家たち』日本経済評論社、一九九〇年、二〇二頁)。拙稿でいう前期河上も、この杉原の時期区分を踏襲する。

(2) 横山源之助『日本之下層社会』教文館、一八九九年、五一―一六頁。

(3) 『農商工高等会議事速記録』第一回、一八九七年、三一―一頁。

(4) 山崎によれば一八九六年四月二日、彼と桑田、加藤晴比古、織田二が集い、社会問題研究会の設立を協議したが、発端であるという(山崎覚次郎『貨幣瑣話』有斐閣、一九三六年、四〇五―四〇七頁)。同月二六日の第一回会合には、高野や小野塚喜平次も参加し、月一回の例会開催がとり決められた(高野岩三郎『社会政策学会』創立のころ)『帝国大学新聞』一九三五年十二月四日。金井の入会は十二月で、翌年四月に、会の名称が「社会政策学会」に定められたとされている(河合栄治郎『金井延の生涯と学蹟』日本評論社、一九三九年、一四一―一四二頁)。

(5) 『社会政策学会叢書』第一冊(工場法と労働問題)、同文館、一九〇八年、五〇―五一頁。

(6) 河上肇『佐藤信淵先生を憶ふ』『明義』第五卷第三号、一九〇四年三月、『河上肇全集』第一卷、一〇六一―一〇七頁。同『佐藤信淵を憶ふ』『日本経済新誌』第四卷第一号、一九〇八年十月、『河上肇全集』第六卷、六九―七一頁。

(7) 河上肇『社会主義評論』読売新聞社、一九〇六年、『河上肇全集』第三卷、八〇頁。

(8) 河上肇『失ふべく一のセシル・ローツを有たぬ我が国』『防長新聞』一九〇二年四月十二日、『河上肇全集』第一卷、五八頁。

(9) 鹿野政直『近代精神の道程——ナショナリズムをめぐって』花神社、一九七七年、二四八頁。

(10) 米原謙『近代日本のアイデンティティと政治』ミネルヴァ書房、二〇〇二年、二二六頁。

- (11) 「経済学読書会」『京都市法学会雑誌』第十卷第六号、一九一五年六月、一二九頁。
- (12) 小熊英二「単一民族神話の起源——日本人」の自画像の系譜』新曜社、一九九五年、一三三七頁。
- (13) 内田義彦「作品としての社会科学」岩波書店、一九八一年、一二二五頁。
- (14) 河上肇「教師としての自画像」『河上肇全集』続七卷、一六五—一六六頁。
- (15) 河上肇「農政学」『実用農業学講義』第一卷第三冊、一九〇三年、『河上肇全集』続一卷、四六八頁。同「評論実業界の学派」『読売新聞』一九〇六年十一月二十九日、『河上肇全集』第三卷、三六三—三六五頁。
- (16) 杉原四郎「旅人河上肇」余話』『関西大学経済論集』第四七卷第二号、一九九七年八月、一一五頁。河上は「子が恩師嘗て予に賜ふに信淵先生画像の一軸を以てせらる。乃ち之を床間に懸けて拝するに、雄偉の氣象室を圧するを覚ゆ」と述べているが、この恩師は松崎と察せられる（河上肇「佐藤信淵先生を憶ふ」『明義』第五卷第三号、一九〇四年三月、『河上肇全集』第一卷、三〇七頁）。
- (17) 河上肇「日本尊農論」読売新聞社、一九〇五年、『河上肇全集』第二卷、一二四頁。
- (18) 河上肇「日本農政学」同文館、一九〇六年、『河上肇全集』続一卷、六二頁。
- (19) 柳田国男「農業政策」『柳田国男全集』第一卷、六三三五頁。柳田と松崎の学問的関連については、藤井隆至「柳田国男——経世済民の学」名古屋大学出版会、一九九五年、一六五—一七〇頁参照。
- (20) 河上肇「経済学上之根本観念」昌平堂川岡書店、一九〇五年、『河上肇全集』第一卷、二九頁。同「経済学原論」上巻、有斐閣、一九〇五年、『河上肇全集』第二卷、一三〇頁。
- (21) 河上肇「日本尊農論」読売新聞社、一九〇五年、『河上肇全集』第二卷、一二九—一二三頁。
- (22) 河上肇「農政学」『農学講義録』第一期第一号、一九〇六年十月、『河上肇全集』続一卷、四八四頁。
- (23) 河上肇「経済時事」『読売新聞』一九〇六年七月十四日、『河上肇全集』第三卷、二七九頁。
- (24) 河上肇「矢野龍溪著新社会を読む」『明義』第三卷第九号、一九〇二年九月、『河上肇全集』第一卷、七八頁。

- (25) 河上肇『日本農政学』同文館、一九〇六年、『河上肇全集』続一卷、一一八—一九頁。
- (26) 松崎藏之助『農業と産業組合』同文館、一九〇五年、一一五頁。横井時敬『農政経済要論』成美堂、一九〇五年、五五—五七頁。新渡戸稲造『農業本論』裳華房、一八九八年、一六四—一六八頁。酒匂常明『日清韓実業論』実業之日本社、一九〇三年、一五頁。
- (27) 河上肇『日本農政学』同文館、一九〇六年、『河上肇全集』続一卷、一二〇—一二二頁。
- (28) 横井時敬『農業汎論』『農学大全』博文館、一九〇一年、三七—三八頁。
- (29) 河上肇『日本尊農論』読売新聞社、一九〇五年、『河上肇全集』第二卷、一二三頁。
- (30) 河上肇『評論 実業界の学派』『読売新聞』一九〇六年十一月二十九日『河上肇全集』第三卷、三六三頁。
- (31) 杉原四郎『日本経済思想史論集』未来社、一九八〇年、二二三—二四頁。宮島英昭『明治末期の河上肇と福田徳三』『東京河上会会報』第五号、一九八五年十月、九頁。
- (32) 内田義彦『作品としての社会科学』岩波書店、一九八一年、二九四—三〇〇頁。
- (33) 河上肇『英国今日の経済的地位』『日本経済新誌』第一卷第一号、一九〇七年四月、『河上肇全集』第四卷、一一頁。
- (34) 『斯民』第一編第一号、一九〇六年四月、三頁。
- (35) 『戊申詔書』一九〇八年十月十三日、文部省『学制百年史』資料編、八頁。
- (36) 一木喜徳郎『智識と道德』『大日本報徳学友会報』第九五号、一九一〇年四月、一三五頁。
- (37) 井上哲治郎『教育と修養』弘道館、一九一〇年、三三—三五頁。
- (38) 河上肇『国情一変せん乎』『日本経済新誌』第三卷第四号、一九〇八年五月、『河上肇全集』第四卷、三三二頁。
- (39) 『河上肇より櫛田民蔵に送りたる書簡集』『河上肇全集』第二四卷、四頁。
- (40) 河上肇『人類原始ノ生活』有斐閣、一九〇九年、『河上肇全集』第五卷、八一—一六頁。
- (41) 河上肇『崇神天皇ノ朝神宮ノ別新タニ起リシ事実ヲ以テ国家統一ノ一大時期ヲ画スルモノナリト云フノ私見』『京

都法学会雑誌』第六卷第一号、一九一一年一月、『河上肇全集』第六卷、三〇八—三一六頁。

(42) 河上肇『経済史学講義 従明治四三年九月至明治四四年五月』京都大学経済学部河上文庫蔵。

(43) 高村象平『西洋経済史』慶應義塾大学経済学会編『日本における経済学の百年』上巻、日本評論新社、一九五九年、七〇頁。

(44) 内田義彦『日本資本主義の思想像』岩波書店、一九六七年、一八八頁。

(45) 河上肇『時勢之変』読売新聞社、一九一一年、『河上肇全集』第五卷、九六頁。

(46) 河上肇『時勢之変』読売新聞社、一九一一年、『河上肇全集』第五卷、一五八頁。

(47) 河上肇『政治学講義 従明治四二年九月至明治四三年六月』京都大学経済学部河上文庫蔵。

(48) J.R.Seelye, *Introduction to political science: two series of lectures*. London: Macmillan, 1896, pp.53-76.

(49) 河上肇『日本独特の国家主義』『中央公論』第二十六年第三号、一九一一年三月、『河上肇全集』第六卷、一一八—一三五頁。

(50) 河上肇『沖繩見聞録』一九一一年、京都大学経済学部河上文庫蔵。

(51) 河上肇『新時代来る』『琉球新報』一九一一年四月五日。

(52) 河上肇『矛盾と調和』『沖繩毎日新聞』一九一一年四月十六日。

(53) 河上舌禍事件については、大田昌秀『沖繩の民衆意識』弘文堂新社、一九六七年、三二六—三二九頁。新川明『異族と天皇の国家——沖繩民衆史への試み』二月社、一九七三年、三二—三三三頁。住谷一彦『沖繩舌禍事件』

『日本の意識——思想における人間の研究』岩波書店、一九八二年。三田剛史『河上肇の沖繩への影響』『早稲田経済学研究』第四七号、一九九八年九月などを参照。

(54) 河上肇『琉球系満ノ個人主義的家族』『京都法学会雑誌』第六卷第九号、一九一一年九月、『河上肇全集』第六卷、三二七頁。

- (55) この跋は、一九四二年に出された『古琉球』改訂版で削除されたが、その承諾を求める手紙のやりとりを機に、中断していた河上と伊波の交流が復活している。これらを含めた両者の具体的関係については、住谷一彦「日本国家主義」と『沖縄学』二「日本の意識——思想における人間の研究」岩波書店、一九八二年。鹿野政直『沖縄の淵——伊波普猷とその時代』岩波書店、一九九三年、六七―七〇、二八二―二八六頁などを参照。
- (56) 伊波普猷『古琉球の政治』郷土研究社、一九二二年、『伊波普猷全集』第一卷、四二三―四二七頁。
- (57) 柳田国男『故郷七十年』のじぎく文庫、一九五九年、『柳田国男全集』第二一卷、三〇〇頁。
- (58) 河上肇『祖国を顧みて』実業之日本社、一九一五年、『河上肇全集』第八卷、一〇―二五頁。
- (59) 島崎藤村『エトランゼ——仏蘭西旅行者の群』春陽堂、一九二二年、『島崎藤村全集』第十卷、二〇六―二二一頁。
- (60) 河上肇『祖国を顧みて』一九一五年、実業之日本社、『河上肇全集』第八卷、三四―六頁。
- (61) 河上肇『独逸経済界の「戦時状態」』『大正朝日新聞』一九一四年十月一日、『河上肇全集』第七卷、四五五頁。
- (62) 河上肇『祖国を顧みて』一九一五年、実業之日本社、『河上肇全集』第八卷、一一六―一二二頁。
- (63) 河上肇『祖国を顧みて』一九一五年、実業之日本社、『河上肇全集』第八卷、一五五―一五六頁。
- (64) 『経済学読書会』『京都法学会雑誌』第十卷第六号、一九一五年六月、二二七頁。
- (65) 河上の旧蔵書をおさめた京都大学河上文庫には、『十九世紀の基礎』の原書と英訳があり、一九一四年九月にロンドンで購入したという書き込みがなされている（杉原四郎『旅人河上肇』岩波書店、一九九六年、六二―六三頁）。
- (66) H.S.Chamberlain, *Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts I/Hälfte*. München: F. Bruckmann, 1899, pp.326-40.
- (67) 河上肇『祖国を顧みて』実業之日本社、一九一五年、『河上肇全集』第八卷、四七―五一頁。
- (68) 河上肇『遺伝と教育』『朝日講演集』第二輯、一九一七年九月、『河上肇全集』第九卷、三八六頁。
- (69) D.S.Jordan, *The Blood of the Nation: A Study of the Decay of Races through the Survival of the Unfit*. Boston:

American Unitarian, 1903, p.7. 河上が引用しているのは、たとえば「経済学読書会」『京都法学会雑誌』第十卷第六号、一九一五年六月、二二六—二二七頁。同『祖国を顧みて』実業之日本社、一九一五年、『河上肇全集』第八卷、五一—五二頁。

- (70) 「経済学読書会」『京都法学会雑誌』第十卷第六号、一九一五年六月、二二九頁。
- (71) 河上肇『祖国を顧みて』実業之日本社、一九一五年、『河上肇全集』第八卷、五三—五七頁。
- (72) R.L.Allen, *Iving Fisher: a biography*. Cambridge, Mass.: Blackwell Publishers, 1993, pp.80-9.
- (73) 河上肇「新しき村」の計画に就て『政治学経済学論叢』第一卷第一号、一九一九年一月、『河上肇全集』第十卷、二〇二頁。
- (74) 清水靖久「河上肇の愛国心」一九八二年、『河上肇全集』第八卷月報、五頁。
- (75) 河上肇『貧乏物語』弘文堂書房、一九一七年、『河上肇全集』第九卷、九九頁。
- (76) 河上肇『貧乏物語』弘文堂書房、一九一七年、『河上肇全集』第九卷、八三頁。
- (77) 河上肇『貧乏物語』弘文堂書房、一九一七年、『河上肇全集』第九卷、八四頁。
- (78) 「河上肇より櫛田民蔵に送りたる書簡集」『河上肇全集』第二四卷、二一九頁。
- (79) 河上肇「現の世より夢の国へ」京都大学経済学部河上文庫蔵。なお、この資料は、京都大学経済学部編『河上肇文庫目録』に記載されておらず、筆者は杉原四郎『旅人河上肇』（岩波書店、一九九六年）で、その存在を知り得た。現物の閲覧を許可していただいた遺族、並びに河上文庫関係者の方々に、感謝申し上げます。
- (80) 小林輝次「思ひつくま」堀江邑一編『回想の河上肇』世界評論社、一九四八年、一八三頁。
- (81) 河上肇「改訂社会問題管見序」一九二〇年、『河上肇全集』第十卷、五二—五三頁。
- (82) 河上肇「自叙伝」一九四七—八年、『河上肇全集』続五卷、二三八—二四〇頁。
- (83) 河上肇「自叙伝」一九四七—八年、『河上肇全集』続五卷、一四〇頁。

(84) 河上肇「小国寡民」一九四五年、『河上肇全集』続七巻、四三一―四三二頁。

(85) 住谷一彦『河上肇研究』未来社、一九九二年、三一―三八頁。

【付記】 本稿は、日本学術振興会の研究助成、及び文部科学省科学研究費助成金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

『近代日本研究』第二十三卷 正誤訂正

前期河上肇における社会政策論とナショナリズム

—もう一つの『貧乏物語』—

一七二頁 一 国民経済と農業保全 五行目

【誤】北進事変

【正】北清事変